

Lecture-Demonstrationの果たしたもの —自研究（1969～1997）の再検討

お茶の水女子大学名誉教授 松本千代栄

問題設定の主旨：「舞踊という現象性の文化に対する研究的接近として「言語」による追跡と共に「非言語—言語」による追跡と研究成果の提出の意義を再認する。即ち、精緻に分化した「言語」記述を一方において、同時にそれを超える「動きに対する感覚・感受・感動の働き」を内包した研究対象の追跡成果を提出することの再認である。即ち、Paper+Lecture-Demonstrationの研究提出の特質と価値に注目し明らかにしたい。

研究方法：既研究報告を対象とし、それらに対する評価と報告を再検討し、その価値と果たした役割を確認する。

研究対象：①国際女子体育会議IAPESGW及び②全国女子体育研究大会（(社)日本女子体育連盟）で行ったLecture-Demonstrationプラス研究論文（講演含む）—1969～1997、以下の13報告。

① IAPESGW

- 1) 1969, 東京, Evolution of dance in Japanese Schools, 6th Congress Proceedings. P.78-87
- 2) 1973, Tehran, Dance as a Guide for Creative Ability, 7th Congress Proceedings. P.152-159
- 3) 1977, Cape Town, Teaching Methods for Creative Dance, 8th Congress Proceedings. P.100-106
- 4) 1981, Buenos Aires, Dance Research ; Problem Situation and Problem Solving. 9th Congress Proceedings. P.27-36
- 5) 1985, Warwick, Qualities of Movement and Feeling Values. 10th Congress Proceedings. P.185-204
- 6) 1989, Melborn, Accumulation and development of Creative Art Experience. 11th Congress Proceedings. P1-15

② 日本女子体育連盟全国女子体育大会他

- 7) 1981, 第15回山梨大会 課題設定と創作学習
- 8) 1983, 第17回宮崎大会 発達段階と課題学習
- 9) 1984, 第18回石川大会 運動と音楽（松本・柳沼）
- 10) 1985, 第19回埼玉大会 課題設定と課題解決学習—運動の質と感情価—
- 11) 1986, 第20回長崎大会 おどり・つくり・みる（松本・相場・山田）
- 12) 1989, 創立35周年記念 課題化とその指導（授業研）
- 13) 1997, ADF-Kobe 連作・新しい風（幼・小・中・高・大・市民）

考察—映像と共に

事例1)は、歴史的研究の事例である。Evolution of dance in Japanese Schools 1969 と題して、日

本における学校ダンスの史的変遷の論考をLecture-Demonstrationを伴って明確化した報告は、海外からの出席者—特に史学者 Dr. Horst Ueberhorst ら—から評価された。また、後の歴史的研究を可能にしたと評されている。（お茶の水女子大学学位論文主査談）

事例4)5)は、実験実証研究の事例である。舞踊の構造・機能1981や運動の質と感情価1985の実験・実証に関する論文で、報告時の評価及びその研究方法を応用した分析研究「Movement and symbol—a Comparative Analysis of Chhau Dance Styles—」（国際交流基金1981）は、その“研究方法と成果の提出”について報告書のhighlightの1つと述べ、この後の研究者の一読を薦めている。（MUSICOLOGY AUSTRALIA 1986, P73-76）

事例8)は、人間発達と創作学習研究の事例である。「発達段階と課題学習」と題した研究報告は、小中・高及び大学学生の実践展開をもつての実施。「講演には、発達段階に応じた学習の実演と課題学習に関する理論の講義によって、舞踊教育の「共通項」を深化しようとする意図が感じられた。実演によるそのモデリングの効果は（略）専門家にも創造性の刺激として波及したのではないかと推察している。」と述べ、「同時に実践に語らせる前段階としての地道な仮説設定作業—舞踊の構造・機能の分析とその要素化、課題設定と学習法（創作学習モデル）—とその検証のための実験研究という、氷山の水面下部分の魁偉さが眼前に迫ってくる。」とし、さらに「そして何よりも、こうした実践の相乗効果による止揚のフォーム形成の仕事に羨望をさえ感じた。…」と、論と実践の融合による“止揚のフォーム形成”を認め、明瞭に指摘し、評されている。（M大学H.T.氏「女子体育」昭59.3月号）意義は認められたと判断できよう。

残された問題：これらの新しい研究報告様式には、多くの Demonstrater の協力が必要であり、また、何を、どのように抽出し、動きとして提示するかを選択も必要である。しかし、これらの「言語—非言語」をもってする研究報告の有効性を考えるとき、舞踊研究法の開拓として注目し、実現の努力・支援が計られるべきと思われる。

（注）映像資料；①「舞踊課題と創作学習」1981、

②「運動の質と感情価」1985他

6th Congress

'69

